



集会所の中には、プラスチックの球が飛び跳ねるリズムカルな音と、お年寄りや若者たちのにぎわしい歓声が飛び交っていた。

ここは福島市飯坂町にある北幹線第一仮設住宅。東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故で避難している浪江町民百二十八世帯、二百六十九人が暮らしている。震災と原発事故から四年余りが過ぎ、災害公営住宅などに転居する人が増え、百九十六戸のうち二十四戸が空室となっている。住民の約六割は六十歳以上で、十代、二十代は少ない。

この仮設住宅に今年六月、二人の大学生が引っ越してきた。福島大学災害ボランティアセンターに所属する佐藤俊一さん(四年生)と高橋航平さん(三年生)だ。同センターが企画運営する、いるだけ支援の第一弾として、九月までの三カ月間それぞれ2DKの空き部屋で暮らす。この日二人は、住民のグループが行っている健康増進活動のひとつである卓球に、ボランティアの学生たちとともに参加していた。

お金や物には代えられない

『いるだけ支援』は、学生が二人ずつ三カ月交代で二年間仮設住宅に住み、住民への声掛けや買い物などの身の回りの世話を行うほか、自治会

仮設に大学生が引っ越してきた

活動をサポートする。高齢者が多い仮設住宅で、空白の世代となっている若者との交流を通じてコミュニケーションを活性化させようというものの、復興庁の『心の復興』事業にも採択された。

新しく住民となった二人の毎日忙しい。朝は住民のみなさんに交じってラジオ体操。月曜日は卓球、火曜日は習字、木曜日はカラオケ、他にも踊りやヨガ、お茶会など、住民の活動には積極的に参加する。もちろん大学にも通う。時間があるときは仮設住宅内を散歩して住民に声を掛けたり、敷地内の草刈りなど

を行っている。引越しの挨拶代りに餃子パーティーを企画したり、お盆にはキャンドルを灯して夕涼み会も催した。

そんな二人を住民は、大歓迎だと口をそろえる。一緒に卓球を楽しんでいたおばあさんたちは、若い人と一緒にいると若返る「家族が増えたようだ」「この楽しさはお金や物には代えられない」と顔をほころばせた。

佐藤 俊一さん



高橋 航平さん



一人ひとりと“お互い様”

高橋さんは引っ越し当日のことが忘れられない。若い人が来てくれて本当によろしいと涙ながらに話してくれたおじいさんがいた。衝撃を受けた、支援しようと思っ越してきたが、夕飯を差し入れてもらったり、体調を心配されたり、逆に自分が気遣ってもらっている。「お互い様」という双方向の関係が築けたこと

は、これまでのボランティア活動と大きく違います」という。これまではボランティアの対象を、被災者」というカテゴリーで見ている。仮設住宅で生活を共にして住民一人ひとりが見えてくると、彼らを、被災者」と一括りにすることがいかに失礼かと気づかされた。「これからも一人の人間として付き合っていきたいと思っています。」



受け継がれる志

佐藤さんと高橋さんが所属する『福島大学災害ボランティアセンター』は、二〇一一年五月一日に発足した。しかし、実際の活動開始は同年三月の震災直時にさかのぼる。震災と原発事故直後、福島大学には大勢の被災者が避難してきた。自主的に集まった学生たちが大学内や市内の避難所でのボランティアとともに炊き出しや被災者の支援に奮闘した。五月に入り大学が始まり、学生たちが戻って来るにつれてボランティアの希望者も増えていった。支援を必要とする被災者がいて、ボランティアを志す学生がいる。両者をつなぐ必要を感じた既存のボランティア団体が中心となって設立したのが、福島大学災害ボランティアセンターだ。当時を知る学生はすでにいないが、彼らの志は続く世代へと受け継がれ、現在約三百五十人の学生がボランティアとして登録している。

足を温め手を揉んで、耳を傾ける

現在は主に、市内の仮設住宅を訪問して足湯やJOYBEATというエクササイズコンテントを活用した健康づくり活動のほか、花見、芋煮会、クリスマス会など季節ごとのイベントを実施している。また、南相馬市で清掃・片付けなどの復興支援活動をしたり、関東、関西などのイベントに参加して福島の元気を発信する活動や、長期休暇の子もキャンプの企画運営も行っている。参加者は登録している学生にメールリストで募る。

定期的に行っている足湯活動は、桶やバケツに入浴剤を溶かした湯を張り、足を浸してもらいながら手を揉むもの。手を触れ合いながら相手の話を傾ける傾聴活動だ。話題は家族のことや趣味、天気などたわいもないことが多く、震災のことを学生からたずねることはない。なぜか、佐藤しおりさん(三年生)は「みなさんと自然な会話を楽しみたいから」と話す。



足湯活動



JOYBEAT活動

楽しいから続けられる

「楽しい。」同センターに所属している学生は、みなボランティア活動を楽しいという。

鈴木悠平さん(四年生)は、「二年生の時、ゼミの教授でボラセンの顧問をしている鈴木典夫教授に誘われました。最初は被災者は暗い方が多いのかなと想像していましたが、明るい方ばかりで逆に元気をもらっています」と話す。ボランティアを通じて地域コミュニティの大切さを学んだことを活かしたいと、公務員を目指している。

鈴木 悠平さん



佐藤しおりさん



仮設住宅で芋煮会



加藤実可子さん

加藤実可子さん(三年生)も、「楽しいから続けていける」という。ボランティアに参加して人との関わりが広がった。「それまではどきどきかという引込み思案だったのが、社会的になりました」と、自身の変化を喜んでいる。

